

氏名	金川 晋吾
ヨミガナ	カナガワ シンゴ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第462号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 写真と存在－父という他者を撮ることについて 〈作品〉 father

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	鈴木 理策
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	たほ りつこ
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	日比野 克彦
（副査）	京都造形芸術大学	准教授		竹内 万里子

（論文内容の要旨）

二〇〇八年の九月に父が蒸発したことをきっかけに、私は父の写真を撮り始めた。父の写真を撮ることは現在も継続しているが、今では私が父にカメラのレンズを向けてシャッターを切るのではなく、三十五mmフィルムのコンパクトカメラを父に預け、父に自分の顔を毎日一枚撮ってもらおうというかたちになっている。この撮影は二〇〇九年の四月から始まったので五年以上続いていることになるが、撮り終わったフィルムの現像やプリントはすべて私がおこなっているため、父はそれらの写真をまだ一枚も見えてない。

このような撮影方法は父が自発的に始めたわけではなく、私が父に依頼するかたちで始まった。毎日自分の顔を撮るように父に依頼したとき、私のなかに何か明確な意図なり考えがあったわけではなかった。そもそも、私は父がこれほど律儀に写真を撮ることを継続してくれるとは思っていなかった。この「父の自撮り写真」においては、いかに父を撮るのかということは問題にならない。父がどのような表情をしているのかということも問題ではない。この写真は、そのような「意味」の領域にはないのである。この写真においては、父がそこにいたということ、父が父自身に向けてシャッターを切ったということだけが問題なのであり、父の「存在」さえ写っていればそれでいいのである。父を撮り始めた当初は、父の何をいかに撮るかということ、つまり父にどのような「意味」を与えるのかということが考えるべき問題としてあった。だが、撮影をおこなっていくうちに、私にとって父を撮るということはそのような「意味」の領域から、次第に「存在」の領域へと移行していった。私は父を撮る経験を通して、写真というものは、「意味」の領域に関わるものであるというよりも、「存在」の領域に関わるものだという認識に至った。

本論文は、私自身の父を撮るという経験について記述することを通して、写真が「意味」ではなく、「存在」と不可分なものであることを浮かび上がらせる試みである。本論文は大きく二つに分けられる。前半部分では、私自身の経験について記述するうえでの参照軸を設けるために、ロラン・バルトの『明るい部屋』を「写真との関係」という観点から読み解く。写真論であると同時に、死についての哲学的な書、自叙伝、私小説等々として読むことができる複数的な書物である『明るい部屋』は、全体で四十八節から構成され、前半の二十四節が一章、後半の二十四節が二章にわけられるというシンメトリーな構造をもっている。一章では、バルトは自分の関心をひくことができる数枚の写真を取り上げ、それらの写真に対する自身の主観的な反応に基づいて写真についての考察をおこなっていく。だが、バルトはこのような方法では写真の本質には到達できないと限界を感じ、これまで語ってきたことを「撤回」する。そして、二章からは、亡き母の存在そのものを与えてくれる唯一の写真である「温室の写真」を基に考察をすすめていく。そしてバルトはこの「温室の写真」を通して、写真はそこに写っている被写体（指向対象）が必ず現実存在したものでなければなら

ないのであり、それゆえ写真の本質はその指向作用にあるということを見出すのである。だが、「温室の写真」を通して見出されたはずの写真の本質は、『明るい部屋』の冒頭で写真についての考察の端緒として、誰が見ても一目でわかる写真の性質として挙げられているものと実は同じものなのである。同じものであるにも関わらず、「温室の写真」において見出されたときには、写真の指向作用は写真の本質としてバルトの心をとらえたのであった。では、そこでは一体何が変化していたのか。それは「写真との関係」である。最愛の母の真実の姿を与えてくれる「温室の写真」は、バルトにとってのみ特別な意味をもつものであり、バルトと「温室の写真」とのあいだには極めて親密で個人的な関係、他の何者も介入しえないような特別な関係が生じているのである。写真に対してこのような関係をもつことができたとき、写真の指向作用は、「なぜ、私はいまここにいるのか」という「存在」についての根源的な問いをつきつけてくるほどの驚きを伴ったものとなるのである。バルトは写真を私たち人間との「関係」という観点からとらえることによって、写真を単なる視覚的なイメージとしてではなく、私たち人間の「存在」そのものを揺るがすような、いわば「狂気」を孕んだものとしてとらえなおそうとしているのである。

本論の後半部分からは私自身の父を撮るという経験について記述しながら、写真と存在の関係について考察をおこなっている。私にとって父の写真を撮るということは、「父と息子」という「意味」に基づいた関係性の外から父を見るということであり、また、父という人間の了解しえない異質な部分＝他者性を「意味」に回収してしまうことなく、了解しえないものを了解しえないままに「存在」させるということだった。また、そうして撮られた「父の写真」は、生身の肉体をもった現実の父とは完全には一致しない異質な他者として、現実の父とは異なるひとつの「存在」としてあらわれてくるのであり、そのような「父の写真」と私とのあいだには、現実の父との関係性とは異なる独自の関係性が生じるのであった。

(論文審査結果の要旨)

本論文は「父を撮る」とはいかなる行為なのかという問いかけに端を発している。写真を撮ることがなければ現れなかった父との多重で流動的な関係性を凝視し、そこから現れてくる写真の絶対的な他者性について深く考察することがこの論考では目指されている。

金川の父親はこれまで何度も失踪蒸発を繰り返してきた。消えては現れるその父親を長期に渡り撮影し続けた作品「father」を通じ、親と子という密着した関係の中に、個人に属さない写真の視線を介在させることで、最も近く最も遠い存在であった父をどのように形象化できるのかを金川は模索してきた。

本論文ではこの不可思議な親子関係を軸とした「父を撮る」ための独特の写真論が、ロラン・バルトの『明るい部屋』で言及される「母を見る」ための写真の欲望と対比されながら展開されてゆく。論考の核となるのは「写真は意味ではなく存在へ向かう」という写真存在論とでもいうべき記述である。金川は父を撮るプロセスの中で、その写真に把握し難い他者性を強く感じとってゆく。それはバルトの写真論では欠落していた特性であり、バルトが母の写真に欲していたのはそうした異質な他者性の徹底的な排除だった。さらに金川は自分が父を撮影するのではなく、コンパクトカメラを父に預け、その顔を毎日一枚撮ってもらう「父の自撮り写真」を始めるようになる。撮影者が不在となるその行為はある意味で、他者性そのものである写真への欲望の帰結点であり、金川が父親を撮影してきたのはそのような質を持つ写真を見たいがためだったのだろうか。それらの自撮り写真は取り立てて何らかの意味作用を持つものではない。ただ父親が毎日毎日、自分にカメラを向け、シャッターを切っていることを指示する写真なのだ。周りの一切の細部は消え、父という存在だけが写っている。それは金川が父親を撮り始めた頃の、父にどのような意味を与えるかという位相からは遠く離れた父の存在の位相への移行を示している。

このような変容のプロセスを本論文は自らをメスで切り開いてゆくかのように精密に分析し、写真とは意味ではなく、存在そのものと不可分であることを浮かびあがらせる。「写真を撮る」という行為を再検証し、個人の問題を超えた「存在としての写真」の可能性へ開いてゆく論考として、本論文を高く評価したい。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、申請者の父の写真である。2008年9月に父が蒸発したことで、申請者は父の写真を撮り始めた。以来、申請者と父との関係に、写真は不可欠となったが、近年、申請者が撮影する代わりに、35mmフィルムのコンパクトカメラを父に預け、父自身が顔を毎日1枚撮影してきた。

本作品は、ロラン・バルト著「明るい部屋」を読み込み、思考を重ねた制作結果を展示である。バルトは、同著において、「写真」は、被写体(指向対象)に「意味を与える」、また、前提には被写体が必須であり、被写体の「存在」を証明するが、一般化を拒む、かけがいのない「存在」を見出す極めて私的な「私にとってしか存在しない」写真に「写真」の本質があるとした。

本作品は、その「写真」の本質に迫る研究と思考による制作の成果である。

バルトは「自分にとって存在する」と実感できる写真には2つの要素があり、第一の要素は、写真の主題やメッセージを形成し、写真への一般的関心や文化的興味を引き起こす「ストゥディウム」と呼び、第二の要素は、その一般的関心を妨害し、自分のほうに「突き刺さってくる」「プункトゥム」と呼ぶ。バルトはそれらによって写真を分類すると共に、常にコード化されない「プункトゥム」を重視し、「プункトゥム」は、個人的で、語りがたい、かけがいのないもの、ひいては、撮影者による意図を排除した「写真」との私的な関わりを直にもつ「私にとってしか存在しない写真」とした。「温室の写真」はバルトが亡くなった母という一般化できない「存在」を見出す「写真」であると語る。バルトは、その極めて私的な写真との関係性について、書くことで「全体のなかに入れる一連合する一、共有化する、共産化する、群生する」ことを試みた。「《それはかつてあった》以外には何も言うことができない」という痛みを伴うものだが、ただ、「何も言うことができない」と書くこと自体が、バルトが母を喪い、母の還元不可能性(かけがいのなさ)もまた「死」の一般性に還元されることを拒み、「悲しみ」から「活動的なもの」に到達することであった。

バルトが「温室の写真」を見せずに、書くことは弁証法的な作用を組み入れる同化の作用と表現している。バルトが喪った母と写真について書く行為と同様の行為として、申請者は父の写真、私的な意味のみをもつ写真を、「全体のなかに入れる一連合する一、共有化する、共産化する、群生する」ことを試みたという。申請者にとっては、そうすることで、蒸発を続け、父を喪った父の「存在」を見出し、その新たな存在として見出そうとした。独自の芸術的論理より、申請者は「私にとってしか存在しない」写真を見せて、申請者の真摯なエクリチュールへと導き、観衆が自らの「存在」の「写真」をよく見るために目を閉じさせる。

本研究作品は、旺盛な研究心に支えられた申請者の粘り強い不屈の励行を積み重ねた成果であり、大学美術館での博士審査展において審査委員一同の高い評価を得た。

(総合審査結果の要旨)

金川晋吾は神戸大学発達科学部人間発達学科でデカルト研究を行い、並行してインターメディウム研究所(IMI)で写真表現を学んだ。神戸大学卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程に入学、その後博士課程に進んだ。これまで個展を9回開催し、国内外のグループ展に多数参加するなど精力的に発表を重ね、2008年から2012年まで江添奨学金育英会の奨学金を、2010年には三木淳賞を受賞した実績を持つ。

自身の父親を主題とする作品「father」は蒸発を繰り返す父親を理解したいという思いを起点とするシリーズで、6年間にわたって制作が続けられてきた。親子という個人的な関係の中にカメラ(機械)を介入させることにより「撮影者と被写体」という新たな関係性を構築し、父親の存在をとらえ直す作業と言える。

論文ではロラン・バルトの『明るい部屋』を参照しながら「写真」と「存在」をめぐる考察が行われている。中でも母親の写真についてのバルトの言及と金川自身が父親を撮る経験と対比的に論じている点は意義深く、論文審査で「金川は父を撮るプロセスの中で、その写真に把握し難い他者性を強く感じとってゆく。

それはバルトの写真論では欠落していた特性であり、バルトが母の写真に欲していたのはそうした異質な他者性の徹底的な排除だった」と特筆された。金川は被写体と撮影者の間に生じる「他者性」を露わにする写真の性質に着目し、自身の制作における経験と照らし合わせながら写真論を展開している。「写真は意味ではなく存在に向かう」ことへ帰結する本論文は存在論も含む内容であり、論文審査結果要旨において「個人の問題を超えた「存在としての写真」の可能性へ開いてゆく論考」として高い評価を得ている。

金川にとって父を撮るとは「父親らしい写真」を得ることではなく、「私の父親であるこの男は何者か？」という問いであり、答えは容易に見出せるものではなかった。試行錯誤を重ね、写真に写る父親と対峙し続ける中で、金川は写真に付される「意味」が恣意的であることを実感し、写真とは「存在」であると深く理解するに至った。35ミリカメラや4×5インチカメラを用い、様々な方法論が試みられているが、これは撮影手法の選択自体が生じさせる意味を無化するためであり、その結果としてコンパクトカメラを父親に渡し、毎日一枚ずつ自分の顔を撮ってもらう作品「father 2009.04.10-」が生まれた。撮影者不在の写真作品をコンセプチュアルな作風と解する向きもあるだろうが、これは金川がたゆまぬ制作を通じて得た写真の本質を示す作品であり、机上において言葉や理論で練り上げた種の作品とは一線を画している。

論文、作品ともに写真を軸に「意味」「存在」の問題が深く考察され、同時に写真の本質をめぐる意義深い論考を含む。制作に向かう真摯な姿勢も高く評価できるものであり、審査会一致で博士号授与に値するとの判断に達した。